独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

「毎日が節水週間」

香川県　高松市立龍雲中学校　二年　河渕　龍之丞

「お兄ちゃん、地球に存在する水が一リットルのペットボトルだとしたら、汚染されていない水はどのくらいだと思う？」水の学習をしてきた妹がそう聞いてきた。どのくらいだろう。コップ一杯くらいだろうか。「はずれ！つま楊枝の先っちょくらいなんやでー。」勝ち誇ったように言う。一リットルのうち、真水はフィルムケース一杯、人間が使える水はそのキャップのへこみ分なのだと言う。その水を僕達は大切に使えているのだろうか。

僕が住む香川県は、年間を通して降水量が少なく、大きな河川がない。そのため、はるか昔からたくさんのため池が造られ生活を支えてきた。日本一の満濃池は有名だが、僕の家のまわりにも平池を始め、三郎池や前池など至る所に大小のため池があり、農業用水として田畑を潤している。また豪雨など流出水の一時貯留池として、河川の氾濫を防いだり砂防せき堤の役割を果たすなど、現在も大きな役割を担っていることがわかった。

昭和四十九年に完成した、高知県の早明浦ダムは「四国のみずがめ」と呼ばれている。ダムの完成により吉野川の水は池田ダムを経由して香川用水に流れ込み、香川県民は安心して水を使えるようになった。と同時に早明浦ダムの渇水は香川の渇水にも繋がる。

平成六年に起きた大渇水は、香川県全土に被害をもたらした。早明浦ダムの利水率が０％を切りダムに沈んだ旧役場の殆どが姿を現わし、大きく報道されたそうだ。調べてみると、香川県では延べ百三十九日間もの制限給水が行われていた。夜間は断水になり昼間は五時間しか給水されない。工場は停止し、喫茶店からおしぼりが消え、会社のトイレにはくみ置きバケツが現れた。当時、高松市内で働いていた母の友人も、仕事を終え帰宅しても水が出ず大変困ったそうだ。

節水の大切さを実感している香川県民だが、実はひとり当たりの一日の水使用量は、全国平均より多いそうだ。また二十年前と比べると、生活様式の変化に伴い一日の使用料は二倍近く増えているそうだ。「うどん県」がゆえの理由もあるだろう。しかし、僕達ひとりひとりが出来ることがあるのではないだろうか。そこでパソコンを使って調べてみた。こまめに蛇口を閉める、食器の溜め洗い、お風呂の残り湯や料理のゆで汁の再利用などどれもすぐに出来そうだと思った。止水栓を調整する自主減圧では、一日に五十～二百リットルもの節水が可能だそうだ。

また高松市としても新たな水資源の確保として、雑用水の利用や、下水処理場で再生された再生水の利用などが行われている。公共のトイレなどの「再生水利用」の貼り紙もよく目にするようになったと思う。

僕は断水を経験したことがない。水道のレバーを上げれば水が出るのが当たり前。水が出ないなど想像ができない。しかし、世界には水道すらなく汚れた水を飲み、感染症で亡くなる子供達もたくさんいるという。誰もが安心して飲み水を利用できるように、全世界に上下水道が整備される日が一日も早く来てほしい。全ての人が安全な水を適切に使用し、排出され、再生された水が再び海に戻っていく。未来の僕達の為にも、大切な限りある水を残していかなければならないと僕は思った。

「お兄ちゃん、節水週間に協力してねー。」宿題の節水プリントを見せながら妹が言った。僕は部活後のシャワーをこまめに止めて使用した。母は洗たくをなるべくひとまとめにして洗ったそうだ。妹はトイレに続けて行こうと提案してきた。今日、平成二十六年以来の第一次取水制限が始まった。たとえわずかだとしても、水を大切にする気持ちを忘れずに「毎日が節水週間」で頑張っていこうと思う。